

＜サンディエゴ便りー留学への若手向きアドバイスー＞

東京大学生産技術研究所・助手/UCSD スクリプス海洋学研究所・客員研究員 芳村圭

私芳村圭は、2006年の6月から日本学術振興会海外特別研究員としてカリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)の付置研究所であるスクリプス海洋学研究所(以降スクリプス)に出向いています。実は諸事情があって申請していた派遣先を変更してアメリカに来たのですが、その経緯や研究体制の日米比較などをまとめて人工知能学会誌というところに寄稿していますので、興味のある方はご覧ください(芳村, 2006)。

現在は、これまで行っていた水の安定同位体を用いた研究も細々と進めています。随分異なることも行っています。それらの内容は今後論文で発表していくとして、ここでは現在の体験を紹介し、海外(アメリカ)留学を狙っている学生・若いポストドク・助手等向けにアドバイスできればと思います。

分業制と規則正しい勤務時間

こちらに来て驚いたのは分業が明確、ということです。研究者は研究を、教育者は教育を、運営者は運営を、事務官は事務を行います。計算機メンテナンスにも専門官が付きまゝ。当たり前のことですが、日本の大学ではあまり出来ていないことです。これにより、研究者のいわゆる雑用が極めて少なくなり、勤務時間も短く済んでいるようです。

研究者に重要なのは Productivity

私のような Visiting Scholar やポストドクに加え、予算ごとに肩書きの異なるさまざまな研究者がいます。ポストドクであろうとプロフェッサーであろうと、接し方は極めて対等であり、普段の研究で肩書きが意味を持つことはほぼありません。そもそも多くの役職が任期付きで、その肩書きが一時的なためもあるようです。研究者に重要なのは Paper の Productivity です。良い Project を思いつきさえすれば、Proposal を書き、その通り遂行し、Paper にまとめる、というその後の一連のことは言ってみれば全て作業、というのが私のボスの持論ですが、もちろん私はまだ実践できません。

大学院生の生活

スクリプスの学生は全員博士課程に所属します。日本でいうところの修士課程はなく、その分博士課程が長く設定されているようです。1年目は Departmental と呼ばれる必須科目とその試験をこなし、3年目までに Qualifying Examination, 4-5年目に Final Examination 及び Dissertation の提出を終えめでたく PhD 取得、という流れのようです。オフィスの周囲数人を見ているだけですが、規則正しく勤勉に見えます。おそらく、厳しい Qualification を乗り越え、サラリーをもらうことによって責任感が生じているので

はないでしょうか。

セミナー運営も学生の重要な仕事

良いセミナーを運営することは、Job hunting のウリにできるほど重要なことです。大物も、Talk の要請にはもちろん、単なる参加要請にも気軽に応えるようです(勝手に参加していたりもします)。大抵のセミナーでは、Refreshment と呼ばれるピザやクッキー・フルーツ・コーヒーなどが振舞われます。その費用は部署もちで、学生は日本と変わらず貧乏なので効果はてきめんです。弁当(紙袋に入ったサンドイッチ)を持参する Brownbagger Seminar もよく開催されます。

TGIF

毎週持ち回りの Host がスナックやビールなどを準備して、金曜日の夕方をスクリプス全体で祝う飲み会(Thank God It's Friday)です。学生が運営していますが、研究者やスタッフも積極的に参加しています。これも費用の大部分は所が持っているようです。金曜日は、これに加えて研究チームでのランチもあるためあまり仕事になりません。

自己主張のススメ

Visiting Scholar はもちろん、他の研究者や学生にも、定期的に発表機会が与えられるということがありません。研究発表は自分で申し込み、研究プロポーザルも協力してくれそうな人々に自ら売り込み、面白そうな研究集会には進んで出席する必要があります。日ごろの生活でもそうですが、自己主張なしではほとんどうまくいきません。様子を尋ねてくれたり、発表機会を与えてくれたりするのは「とても親切」なのです。日本でのそんな状況に甘えず、自発的に自分をアピール(例えば他大学でのセミナー発表など)するべきだと思います。

まずは自己資金獲得

アメリカでポジションを獲得することは挑戦的ですが、非常に競争的で不利も多いです。まずは日本での資金獲得を目指しましょう。自己資金持ちの訪問は大いに歓迎されます。資金不足の場合でも、保険をカバーしてもらったりパートタイムで雇用関係を結んでもらったりと、特別な配慮をしてもらうことも交渉次第で可能かも知れません。とにかく一部でも自前の資金を用意することが近道です。私のような海外特別研究員のほか、特別研究員(DC/PD)でも海外の研究者に受け入れてもらうことが可能ですし、大学や民間企業の助成も探せば結構あります(海外・研究・助成で Google してみてください)。学生ならば、大学の交換留学プログラムなどで、将来研究するための布石として異文化に触れておくこともとても大切だと思います。

参考:芳村圭, 日本の助手は「番頭さん」から脱却せよ, 人工知能学会誌 Vol.21, 6, pp724-726, 2006.

